［第９回日本言語文化学研究会発表要旨］

真名本『曽我物語』研究 —— 梶原氏をめぐって ———

大川信子

（1994. 12. 10発表）

曽我物語における梶原氏の描かれ方から、物語の梶原氏に向けた視点を明らかにし、物語がどのような基盤の上に成立していったのかを知る一つのヒントを得たいと思い考察を進めた。

物語中梶原氏は、頼朝の側近として描かれる場合が、ほとんどである。当時の梶原氏の有り様が比較的素直な形で描出されているということであろう。この点に関しては別に考えてみた（「真名本『曽我物語』研究 —梶原氏概観 —— 」『常葉国文』第20号）。

ところで曽我物語の中で、狩は重要な意味を持つ。そして梶原氏に関する考察では、狩の肯定のことと歌徳説話のことが問題となる。歌徳説話は狩場巡りのさなかの話柄である。本発表では後者に絞って考察してみた。景時と和歌を詠んだ海野氏が称揚されるのは、物語の語り手・作者が、海野氏と何らかの関係があり、海野氏の名誉をあえて説き立てたかったゆえであるとされてきた。梶原氏についてはどうだろうか。梶原氏の流れを汲む長尾氏ゆえであるという指摘もある。そうした点以外にも梶原氏称揚の意図があるのではないだろうか。ひとつの手掛かりとして景時が和歌の褒賞として久能十二郷を賜ったことが挙げられる。この久能十二郷に注目してみたい。

曽我物語では、他にも久能が出てくる。兄弟の死骸を火葬して骨を曽我に持ち帰った僧がもと久能法師である。また大磯の虎が兄弟の死後回国修業中、駿河で立ち寄る寺院の中にも建穂寺、久能寺、平沢、大窪の名があがっている。これらは、駿河七観音と呼ばれる諸寺院であり、いずれも十二社権現を祭っていた。久能寺と建穂寺は、国分寺の衰退と入れ代わりに付近を代表する寺として力を持つに到ったとされる。さらに平安時代から建穂寺と久能寺が国分寺別当に替わって惣社浅間神社の別当を勤めたという。駿河の惣社は、富士大宮が本宮であったが、延喜元年に国衙に新宮を建立しそれを惣社としたという。国庁の浅間神社が惣社として史料に現れ

るのは、久安二年の般若寺の大般若経の奥書が最初であるという。

『駿河志料』や『浅間神社年中行事』等によると、楽衆や地蔵舞という芸能面において浅間神社と久能寺との関わりがあったことが確認できる。

曽我兄弟の死を意味あらしめる働きを担っているもののひとつが、富士浅間大菩薩である。これは赫屋姫系統の話である。類似するものとして神道集がある。しかし、本地仏の記事は曽我物語のみにあり、千手観音とする。これは、『久能寺縁起』によれば久能寺の本尊であり、のち行基によって彫られた新しい駿河七観音の本尊でもあった。これら七観音の寺院では、浅間の神を十二社権現の一社に鎮守として祀っていた。曽我物語では浅間大菩薩の本地を千手観音としており特異である。林羅山が駿府で見たという赫屋姫系統の縁起が、駿府の浅間神社の縁起である可能性もある。その本地を駿府のあたりでは浅間神社と久能寺・建穂寺とのかかわりから千手観音であるとして語っていて、それが曽我物語に取り込まれて伝わったのか。曽我物語を支える基盤のひとつとして駿河の寺社があったことを想定しておきたい。

以上の点から、久能寺を含む久能十二郷を梶原が賜ったとすることは、かなり重要な意味を持つ事柄になろう。何故そのようにしたのか。景時の名誉の歌徳説話を語ることで、梶原氏の霊を鎮めるということがあったのではないだろうか。駿河国で一族の多くが無念の最期を遂げた梶原氏の名誉譚において、和歌の褒賞に久能寺周辺を与えることで、千手観音による梶原の済度のことが意図されていたと思うのである。

本発表では、梶原氏に注目して、物語の背景に駿河の地からの働き掛けがあった点についてその可能性を探ってみた。物語の梶原氏の描出については、同氏の縁に関わる者の関与もあるのかもしれない。その点に関しては次なる課題として考えてみたい。

（常葉学園短期大学　助教授）